

---

# シャドーディザイア

たけばやし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シャドーデザイナー

### 【Nコード】

N9291W

### 【作者名】

たけばやし

### 【あらすじ】

人の脳波が現実を書き換える理論、それを利用した魔術が存在する世界。

誰でも使えるはずの魔術を使えない少年と記憶を失った少女が出会う。

少年は魔術に支えられた世界の真実に挑み、少女は自分に課せられた運命に抗う。

自分の願いを現実にかえるため魔術を力に戦う彼らを、人は魔術師と呼ぶ。

譲れない想いを抱いて巡り会う、彼らの運命は ？

これは、それぞれの大切なもの、護りたいもののためにぶつかりあう、魔術師達の物語。

## ブログ それはとても大切な願い（前書き）

初めての投稿をするたけばやしです。

投稿が不定期になったり、文がおかしくなったりするかも知れませんが、皆さんが楽しめるような小説を目指して頑張りたいです。

では、よろしく願います。

## ブローグ それはとても大切な願い

静寂が支配する空間。そこは、数えきれないほどの機械で埋め尽くされていた。

パイプとコードが絡み合って床を覆い、鉄の箱が部屋本来の壁を全く見えなくしている。

天井には照明がついてはいるが、一つも明かりを灯してはいない。その、機器のモニターが放つ光しか存在しない暗闇のなかで、二人の男が蠢いているのを少女は感じていた。

自分を取り巻く様々な機器を弄り、そこから情報を盗み出そうとしているようが、機器のセキュリティレベルが非常に高いためどうやら防壁を突破できないようだ。

悪態をつきながら二人とも作業を続けるが、しばらくたってもまるで状況が進展しない。

そのうち片方が作業を投げ出した。その姿には無力感と絶望が漂っている。よほど重要な目的があったのだろう。

それもそのはずだ。命を賭けてまで為したいことがなければ、誰もこんなところで潜り込まないだろう。

ただでさえ、ここに潜入すること自体が自ら進んで命を捨てるようなものなのだから。

今、少女と男達がいるこの部屋は都市の最深部に位置し、最重要機密の塊とも言える機器が置かれている。

ただの機密事項ではない。

その中には、知れば権力者に消されてしまってもおかしくないようなレベルのものが数多存在している。当然ここに至る通路も尋常ではないほどの警備が敷かれているが、男達はそれを何とか潜り抜けてきたようだ。身体中に傷があり、酷いところは骨までみえている。

このままでは命に関わりかねないが、彼らには自分の命よりも重

要な目的らしい。

「どうしますか。こいつのセキュリティは私達では突破出来ません」  
作業を投げ出した男が半ば茫然自失になりながら相方に尋ねた。

「出来ないじゃねえよ、やらないと俺達の家族は皆死んじゃうんだぞ！？」

やけになりながら作業を続ける男が唾を飛ばしながら叫んだ。

「セキュリティが突破出来ないなら情報媒体自体を盗めばいい！それも無理ならこいつを解体してデータを物理的に手に入れれば済む！」

強気の口調だが、その言葉からはそうであつて欲しいという切実な願いが感じられた。

それを見ている少女が申し訳なくなってきた。

彼女は知っている。

ここにある機械はこのように万が一侵入されても被害を無くすため、全て超高度のセキュリティで守られている。情報媒体なんて無用心に置いてあるはずがない。

また、破壊や物理的強奪を防ぐため全て部屋に固定され、一つの装置を除いて並の魔術ではかすり傷すら付けることが出来ない装甲を持つ。

彼らの目的が何かはわからないが、少なくともそれを知る必要がないほど、彼らの行動が成功する確率は低い。

いや、0と言つてもいい。

「クソ、クソ、クソ！」

自分の目的が果たせないことを知った男は、その絶望と怒りをコントロールパネルにぶつけたが、骨がぶつかる鈍い音がしただけ。

機械はびくともしない。

「ちくしょう、ここまできて、何も出来ねえのかよ！？」

「ここは一旦引きましよう、じきに警備が駆けつけます」

嘆く男をなだめようと相方が落ち着いた口調で語りかける。しかし、その声すら虚無感がにじんでいることに、はたして本人は気が

っているのだろうか。

しかし、絶望する男に答える様子はない。

「このままでは無駄死にするだけになりますよ。秋月さんなら策を打ってくれます。次の機会がきつとくる。ですから」

「うるせえ!!」

なおもなだめようとする声に返ってきたのは罵声だった。それも、ありったけの憎悪を込めたどす黒いものだ。

「二度目があると思ってんのか。警備は変更され、セキュリティレベルは更に上がる。一度しかない機会なんだ!…こうなったら!」

男はある機器に詰め寄った。

その右手に何処からともなく武骨な大剣が召喚される。

「こいつだけでもぶっ壊してやる」

それは、この光景を見つめる少女を内包した装置。導入されたばかりであるため、外装が強化されてない唯一の装置であった。

「こいつなら、俺の術式でも破壊できる」

だが、それを聞いたもう片方の男が血相を変えた。

慌てて相方を止めようとする。

「駄目だ! 私達の目的はあくまでも交渉材料を手に入れることだ。それを破壊すれば無関係の人にも影響がでるぞ。秋月さんはそんなことを望んでいない!」

だが、必死の説得も男の耳には届かない。逆に、火に油を注いだだけだった。

「黙れ! これが原因の装置の一つなんだろうが。俺の家族を傷付けて、それも知ろうとせず生きてる奴らのことなんか知るかよ!」

その手に握る大剣を振り上げながら叫ぶ。

そして、それを迷いなく振り下ろした。

「やめろ!」

「碎け散れ!」

自分目掛けて放たれた大剣の一撃を、少女は見ていた。  
あれを受ければ自分は死ぬだろう。

その確実で揺らぎない結末が、何故か理解出来なかった。

……いや、したくなかった。

（……私、死ぬの？）

少女は生まれてからずっとここにいた。  
ずっと閉じ込められて生きていた。

（死ぬの？）

彼女は道具だった。

この装置を動かすためだけの、替えがきく消耗品だった。

（私、何もしてない……）

自分の意思で何かを選ぶこと      それ以前に自分の意思で生きる  
ことすら、出来てない。

道具として生まれて、道具として死ぬ。

（嫌……だよ）

刃が迫る。

（死にたく……ないよ……!）

それを見つめることしか出来ないまま、少女は叫んだ。

「私    生きていたいよ……!」

そして、次の瞬間

駆け付けた特殊警備員が見た光景。

それは。

元のカタチを微塵たりとも残していない。



惨殺された、成人男性約二人分の肉片だった

## 1 想いをチカラに変える者

自分が落ちこぼれたとは理解していた。

自分に魔術の才能が無いこともわかっていた。

だが、それがまさかこんなことに繋がるなんてことは思っても見なかった。

何故、何故に

「僕一人だけゴールデンウィーク丸々潰れるんだよ!？」

正確には丸々ではなく半分位なのだが、一つにまとまって潰れずに、休み全体にまんべんなく用事が散らかっているため余計にタチが悪い。

お陰さまで家族一同で行く旅行がパーになりかけた。

妹を始め皆揃って一人残すのは可哀想だ、との理由で一時は旅行そのものがなくなりかけたが、さすがに自分の不出来のせいで家族の団欒を潰したくなかった。

特に、妹なんか一週間前からウキウキしながら服を選ぶほど楽しみにしていたのを知っていたので、なおさら潰せない。

泣く泣く家族を説得して、旅立つ皆を玄関で見送ることになったのがつい一時間前のこと。

桐崎知哉きりさきともやは自分のベッドに寝転がりへこんでいた。

彼の休みが潰れた理由。それは、魔術の適性検査が入ったからだ。彼は魔術を使うことが出来ない。それも、基本的にどんな適性を持つ人間でも起動出来るような基礎術式さえ扱うことが出来なかった。

彼自身は自分に才能がないと思っているし、無いものはねだつても仕方がないと考える方なので、わりと割りきって考えていた。

しかし、学校側からは知哉が特殊な魔術適性を持っていて、それが原因で術式が起動出来なくなっていると考えられていたらしい。入学直後から、検査を勧められてきた。

正直な話、彼にとってはありがた迷惑だったが、その点については家族も心配していたのでようやく受けてみることにした。

……まさか、検査には時間がかかり、学校としては平日に時間をとる訳にもいかず、最初から連休にまとめて検査を行う予定で、知哉が申し込んだ時に一番近かった連休がゴールデンウィークだとは知らなかった上に思っても見なかった。

あとになってそのことを知ったが、すでに遅く、今に至るというわけだ。

こんなことになるなら受けるんじゃないかと本気で思う。

しかも、ゴールデンウィーク初日の今日は検査が入ってない。つまり、何もすることがない虚しい一日を過ごさなければならぬのだ。

日が暮れるまでずっとこのままふて寝しようとも思ったが、いくらなんでも時間がもつたいなさすぎる。

とりあえず居間に移ってテレビをつけてみると、物騒な事件が流れていた。

都市中枢の管理ブロックに不審者が侵入したらしい。目的も、その後の動向も全く不明。幸いシステムは無事で異常も特にないらしい。

会見で謝罪する管理者達に多数の記者が、危機管理体制が甘かったんじゃないのか、責任はどう取るんだと質問とも罵倒ともとれる言葉をぶつけている。

チャンネルを変えてみたが興味がわくような番組は放送していなかった。

「……外に出よう」

無造作にテレビを切り、家の鍵をとる。

外出すれば気分が変わるかも知れないし、気晴らしも見つかるだろう。

ドアを開けて、人が減り静かになった家を出た。

知哉が住む街は、その外周を城壁のような巨大な壁に囲まれている。

災害対策のためのそれは、東京近辺を全て包み込みその中を一つの都市として成立させていた。

あまりの大きさに、東京内部ならほぼどこからでも壁を見ることが出来る。

当然、知哉の家の前からでも見えるし、彼もそれを当たり前の風景として認識していた。

しかし、今日に関してはどこか違う。

（閉じ込められている感じがする…）

遠目に、微かに見える城壁に対して激しい違和感を感じる。

実害はないし、むしろ自分たちに有益な物のはずだが、あの壁を見て何故かそんな感覚を抱いてしまった。

それは、昨日までは感じたこともない感覚だ。

何故だろう。知哉はこの都市をべつに嫌ってなどいない。今まであの壁を見ても何も思わなかった。

だが、今は違う。

自分がまるで棺に閉じ込められて、最期を待っているような不気味な感じ。

あの城壁が今にも迫ってくるような、胸が押し潰されるみたいな圧迫感。

そして、恐らくは自分の遠く背後にまで存在するであろう街並みが、死神に変容してすぐ後ろに立ち、手にした大鎌を振りかぶっているような、殺気にも似た悪寒。

あまりの気味の悪さに、今すぐあの巨大な境界線の外に飛び出したいくなる。今感じるこの感覚は、あの壁を外から見れば何か変わるかも知れない、そう思えるほどに。

その時、果たして自分は何を思うのだろう。

今頃、壁の外に出ているはずの家族は何を思っているのだろう。

そして、五年前、この都市を出た兄は、一体どんな思いを

「 いけね」

知哉はだんだんと余計なことが浮かび始めた思考を停止させた。気晴らしに家を出たのにこれでは意味がない。どうも、自分は気分が沈んでる時に後ろ向きの考えをしてしまう。

後ろ向きにしては不気味過ぎる感覚だが、何かの勘違いだろう。物事を悪く考えすぎている。

……とにかく今は気分転換だ。このままでは鬱にでもなりそうだった。

「よし、今日は遊び倒そう」

まずはゲーセンにでも行こう。ユーフォーキャッチャーは苦手だが、練習してみるのも悪くない。レーシングゲームも久しくやってないから、少し挑戦するのもいい。財布に厳しいなら本屋で立ち読みでもしよう。その後は

そこで彼が不審な様子で移動する少女を見つけたのは、本当に偶然だった。

彼女は物陰から物陰に移り、何かの様子を伺っている。その姿はまるで、誰かを尾行しているような雰囲気だ。

そこで、知哉は少女が自分の知っている人物であることに気がついた。

「あいつ……橘だよな？」 たちはなかりん 橘可鈴。知哉のクラスの委員長をしている活発で猪突猛進な少女だ。

普段、色々事情があつてよく遅刻する彼を怒っている。

それが何故、追跡みたいなことをしている？

何か、嫌な感じがする。家を出たときに感じた、不気味な感覚そっくりな悪寒。

気がつくと、可鈴に近づいて声をかけていた。

「橘……おい、橘」

余程何かに集中しているのか、すぐ横で呼び掛けてもこちらに気がついてない。

歩いていく彼女にあわてて近づき、肩に手をかけてもう一度呼ぶ。

「橘」

「っ！？」

ビクリ、と肩を震わせ振り返る可鈴。

最初は驚きが浮かんでいたが、一度安堵し、やがてその表情が苛立ちを含んだ怒りに変わる。

「驚かせないでよ、桐崎君。何の用？」

かなりの棘を含んだ言葉に驚くが、ここで引き下がっては意味がない。何をしているのか訊こうとした。

「いや、偶然みかけてさ。何をしているのか」

だが、最後まで訊ねきることは出来なかった。

可鈴が彼の言葉を遮ったからだ。

「あなたには関係のないことよ。邪魔になるから関わらないで」

そのまま話を打ち切り、どこかに歩いていく。

彼女が視線を向ける先に、一人の男がいた。

最初に知哉が感じた通りに、どうやら可鈴はその男を尾行しているみたいだ。

何が理由かわからないが、危険があるかも知れないし、放っておく訳にはいかない。

小走りで可鈴に追い付き、再び話しかける。

「何やってるんだよ橘」

声に反応して振り向いた彼女は、心底嫌そうな顔をしていた。

「しつこいわね。関係ないって言っているでしょう」 また知哉を

おいていこうとしたが、今度は食らいつく。

「関係ないけど、明らかに怪しい様子のクラスメイトを放っておけないよ」

可鈴は反応しない。無視しているのか、また集中していて聞こえていないのか。

「おい、橘！」

それでも話しかけ続けると、とうとう無視しきれなくなったのか

答えを返した。

「いい加減にしてくれないかしら。あなたには危ないのよ、いざという時に……」

そこまで言っで、しまったと言わんばかりの表情を浮かべた。

「帰って。今言ったことは忘れて」

そのまま追跡を続けていく可鈴。

案の定、「危ない」ことをしている。

（橘が危険に巻き込まれる前に止めないと）

急いで追い付く。

「危ないならなおさらだよ。尾行なんてやめといた方がいい。何で追いかけているのか知らないけど、不審者とかなら警察に任せたほうがいい」

そこで、気がついた。周りに人がない。

小さな空き地のような場所に、知哉と可鈴と男の三人しかいない。

「さっきからつけて来ているな。……一人増えたか」突然呟かれた言葉が男のものだと気づくと同時。

男が凍てつく殺気をまといながら振り向いた。

その瞬間、世界が凍りつき、動くはずの身体が動かなくなる。

膝がわらい、歯が鳴り、全身が震えているのに自分の意思ではピクリとも動かせない。

（……なんだよ、これ）

視界の隅の可鈴も同じなのか、冷や汗を流して震えている。

「無関係な人間を殺すのは気がひけるが、気がつかれたなら仕方がない」

逃げることも出来ない知哉達に、男が右手を向けた。その先に、見えない力が集まっていく。

……このままじゃ、殺される。その明確な光景が、脳裏に浮かぶ。

（……動け）

集められた力が風を巻き起こし、その風が刃へと形をなす。

（動け、動け！！）

刃がこちらへ向けられる。その一撃は、知哉と、横にいる可鈴を容易く両断するだろう。

（このままじゃ）

「恨んでくれていい。お前達を殺してでも、なさねばならないことがある」

（また、誰かが）

そのとき、刃の周りに集まる風が、偶然地面の石を弾きとばした。

（理不尽に、傷つく）

その一つが、知哉の頬を掠める。

鋭い痛みがはしり、その瞬間、凍った身体が自由を取り戻す。

（そんなのは、もう、嫌なんだ！！）

同時、知哉達に風刃が放たれた。

「う　　おおおお！！？」

全力で可鈴目掛けて飛ぶ。そのまま彼女を抱えて転がった背後を刃が駆け抜けた。

一撃をしのいだことに安堵する暇もない。急いで起き上がると、男はすでに新しい風刃を形成している。

（マズイ…避けれない！）

再び放たれる風。逃げられないことを理解して、それでも足掻こうとするが

「下がって！！」

可鈴が知哉を押し退けて前にでる。

「橘！？」

迫り来る一撃に彼女は手を向ける。

そして、呟く。

「燃えろお！！」

その瞬間、彼女の魔術が起動する。

魔術。



それは、今から半世紀以上前に提唱された特殊脳波物理干渉理論によって引き起こされる現象。

人間の脳、その未使用部分に存在する器官から、感情の変化や思考によって放たれる特殊な脳波。

それ自体は微弱だが、人体内の特殊な神経ネットワークに伝達され、その中で増幅する。

増幅された脳波は、その元となった思考を世界に押しつけ、書き換える。結果、物理法則はねじ曲げられて、本来ならばおこりえない現象が引き起こされる。

そう、風による刃や、それを相殺するような爆風のような。

可鈴が生み出した爆風が風の刃を掻き消す。

その余波は烈風となって周りに飛び散るが、相対する二人と可鈴の後ろにいる知哉には何の影響も及ばさなかった。おそらく防壁を展開しているのだろう。

彼女は続けて自身の目の前に三十センチほどの直径の炎の塊を形成させ、男目掛けて投げつける。

一直線に進む炎弾は、しかし男の目の前に作られた風の防壁に阻まれ、拮抗した。

男が反撃に移ろうとするが、火球の勢いを止めることができず、防御で手一杯の状態。

そこを可鈴は見逃さなかった。

「まだよっ！」

新しく頭上に先ほどよりも巨大な炎を生み出し、放つ。

進むにつれ炎は形を変え、人ほどの大きさの大蛇になって動けない男に迫り、丸呑みにした。

「やった!？」

だが、次の瞬間蛇の腹が膨らみ、中から破られる。ぼろぼろの姿で出てきた男を睨み付ける可鈴。

彼女を睨み付ける男。

そして

結局、自分は何の役にも立てなかった。

可鈴が優等生だとは知っていたが、魔術師相手に圧倒できるほどの腕前とは思っていなかった。

男は勝てないとふんだのか、最終的に逃げ出した。

それまで、自分はひたすら彼女に守られていた。

……自分の無力が嫌になる。

今、可鈴は肩で息をして膝をついていた。

「大丈夫…か、橘？」

「ええ…ちよつと疲れただけ」

「……そうか」

ちよつと、と言っているが、疲労困憊にしか見えない。

「ごめん、橘…」

言われた可鈴は少し戸惑っている。

「何で謝るの？むしろあなたは邪険にしていた私を助けてくれたじゃない」

「いや、あれは偶然だよ」

石が当たらなければあのまま動けずにいただろうから。

それを聞いた彼女はむしろあきれ顔になる。

「偶然でも、助けてくれたのは確かでしょう？」

少しよろけながら立ち上がり、可鈴はこちらを向く。

そして、微笑みながら告げた。

「あなたが何を悪いと思っているかはわからないけど、これでおあいこ。ありがとう、桐崎くん」

ようやく、人が駆けつける音がする。警備員に、治療の術式が使える魔術師もいるはずだ。

関係者の自分達は事情を聞かれるだろう。もとはただの気晴らしだったが、帰るのは遅くなりそうだ。

携帯で家に連絡しよう。そう思って、電話をかけた瞬間に思い出す。

「……今、誰もいないじゃん」

時計は十一時を回っていた。

帰り道、再び見えた外壁に、朝と同じ言いようのない不気味な感覚を覚えつつ歩く。

そのせいだろうか、目の前に着くまで気がつかなかったのは。

自宅の前に、真紅の髪をした女の子が倒れていた。

「大丈夫!？」

駆けより、声をかける。

返ってきたのは、うまく聞き取れない呟き。

医者を、呼ばないと。

パニックになりそうな頭を必死で落ち着かせつつ、携帯を取り出す。

何かの発作で倒れているのか、事故なのか。状況が全くわからない。救急に電話しようとして、番号を押し間違えた。すぐさまかけ直そうとするが、今度は番号がわからなくなる。

「何やってるんだ僕は」

落ち着け。一回深呼吸する。

……よし、番号は思い出せた。

素早く、されど慌てずに行動しろ。

その時、少女の呟きが聞こえた。

「ご飯」

思わず、携帯を落としてしまった。

「まさか、行き倒れ？」

何か、さっきまでの自分が馬鹿らしくなる。

ため息をつき、まずは少女を起こすことにした。

家には自分含めて四人いたので、食べ物は余っているはず。

「今日は、長い一日になりそうだな……」

ふと空をあおぐ。

星が輝くきれいな夜空。

その中で、月だけが不気味に赤く染まっていた。

## 2 汝、深淵より目覚めよ

ジリリりと、頭の近くで音が鳴っている。目覚まし時計だ。

知哉が目を開けてみると見えるのは自室の天井。身体に感じるのはベッドの感触。

普段の癖で、休日であるはずの今日も鳴るようにセッティングしてしまっただけらしい。

……まあ、その「普段」もセッティングしているだけであまり役には立っていないのだが。

「珍しく目が覚めたな……」

よりによって、役に立ったのが休日とは、皮肉としか思えない。

今日はゴールデンウィーク二日目。何が悲しくて早起きしなくてはいけないのか。

という訳で。

「寝よう」

休みなら妹に叩き起こされることもなく、ぐっすり寝ることができ。

そう、ゴールデンウィーク二日目みたいな休みには

「ん？」

何かがおかしい。

そもそも、何で自分は家にいるんだ？

本当なら家族旅行に行っているはずなのに、何故？「そうだ、魔術適性検査だ」

で、その検査はいつからだったか。記憶を探る。確か、連休二日目からだっただけ。

「今日じゃん」

二度寝なんてしてられなかった。昨日はすっかり忘れて準備なんか全くやってない。なので、今から書類やいろいろ集めないと検査を受けられない。

はつきりしない頭のまま、彼はベッドを這って降りようとしたのだが。

そこで、何かムニユリとしたものに手が触れた。

（ムニユリ？）

少なくともベッドが立てる音ではない。恐る恐る自分が触れている何かを見てみた。

そこには。

妹の寝間着をきて、穏やかに寝ている紅い髪の少女がいた。

知哉が触れているのは、その、彼女の胸だった。

「な……？」

一瞬で思考が凍りつく。

最初に彼の頭に浮かんだのは疑問だった。

何で見知らぬ少女が妹の寝間着をきて自分のベッドで寝ているのか。

次に、少女の姿が彼の目に飛び込んできた。

服は少し乱れて、胸やヘソの辺りが覗いている。寝汗のせいでそこに、腰まで伸びた紅い髪が張り付いて、なんともいやらしい。

（いやいや！こんなこと考えてる場合じゃないだろ僕！？）

見てはいけない。そうは思っのだが、なかなか目を逸らすことが出来ない。

先ほどよりも断然必死で記憶を探る。何故こうなった？

昨日、知哉は可鈴と共に不審な魔術師に襲われた。

魔術師は可鈴が追い払ったが、彼もその場にいたので事情を聞かれることになった。

結局、開放されたのは十一時過ぎ。家に帰ると、今日の前で寝ている少女が行き倒れていた。

その後は……。

知哉が思い出したそのとき。

「う……ん……」

少女がうめいた。どうやら目覚めかけているらしい。そこで彼は、自分の体勢に気がつく。

寝ている少女の上に這って、その手で胸に触れている。

（これって、まずくないか？）

いろいろ問題だし、言い訳出来ないし、高校一年の知哉にはかなり刺激が強かった。

「う、うわわわ……！」

瞬時に目が覚め、同時に血の気が引く。

慌てて彼女の上から飛び退けるが、バランスを失いベッドから転がり落ちて、思い切り床で頭を打つ。激痛が襲い、大きな音が響く。

「痛っ……！」

頭を抑えて唸っていると、少女がベッドの上から上体をおろして床に手をつき、こちらを覗きこんできた。

「大丈夫？」

自分の頭が鳴らした音が、彼女の目覚ましになったらしい。

そんなどうでもいいことを考えながら、知哉は大丈夫だと答えようとす。……が、少女の体勢に今度こそ頭が完全に混乱した。

彼の視点からだ、少女の姿がやたら胸を強調したような格好に見えたのだ。いわゆる、雌豹のポーズだったか。

「大丈夫、大丈夫だよ！」

このままだと理性を失ってしまいそうだ。

心底そう思い、全力で部屋を出ようとする知哉。だが、混乱していたせいで注意力が散漫になっていた。

慌てている速度のまま、足の小指を本棚にぶつける。

「……！」

あまりの痛さに地面を転がりまわるはめになった。

少女は心配そうにこちらを見ている。

そんな彼女に大丈夫と答えながら、いつもの妹に叩き起こされる朝が平和なものだったのだなあと思う知哉であった。

あの晩、少女を家に迎え入れたあと、なけなしの知識で作った料理を振る舞った。

決して上手に出来たものではないが、少女は「美味しい」と言い、時には眼に涙さえ浮かべていたその顔を、忘れることが出来ない。

食後に風呂を用意したのはいいが、彼女は荷物を持ってなく、そのことはすなわち着替えがないことを示していることに気がつき、慌てて妹の寝間着を用意して貸し出した。

そのまま妹の部屋を使ってもらおうと考えていたのだが、何故か一人でいることに怯える彼女が彼のベッドに潜り込んできて、朝に繋がる。

そして今、知哉は洗濯機の前で首をかしげていた。

行き倒れていた少女の服を洗おうと思っていたが、全然汚れていない。まるで、新品のようなのである。

ついてる汚れは地面に倒れてたときの砂ぼこりくらいで、それさえも手で払ってしまえるものだ。

……行き倒れになるような人が、新品同様の服を着てたりするものなんだろうか。

そんな疑問が浮かぶが、問題はそこではない。

「これ、どうやって洗えばいいんだろ」

彼女の服が独特すぎて、洗濯機で洗っていいのかわからないのだ。その服の特徴を一言で言えと言われると、知哉には「天女の羽衣みたい」としか答えられない。

少女の髪と同じ鮮やかな紅で、どことなく浴衣や巫女服のような印象をうける羽衣。

大抵はこういうときに語彙力が欲しくなる知哉だが、これに限っては誰も似たような答えしか返せない確信がある。

「どこで売ってるのかな」

少し手を加えたら、コスプレに出来そうなレベルだ。



素材は丈夫そう。少なくとも洗濯機で洗って伸びたり痛んだりするような感じではない。

となれば色落ちだが…。

「気にしても仕方ないか」

自分にはわからないし、洗わない訳にもいかない。

とりあえず、洗濯機に突っ込んで洗うことにした。

行き倒れていた少女に着替えがあるはずがないので、妹の部屋から彼女が今日着るための服を引っ張りだす。

あとで確実に怒られるが、自分の服ではサイズが合わないし、妹の体格がちょうど彼女と同じくらいだったので、この際仕方がない。「怒鳴られるのは覚悟するか」

着替えてもらっている最中に洗い終わった洗濯物を見ると、どうやら色落ちはしなかったみたいだ。

きれいな紅色を保ったままの羽衣を干して、小学生でも作れそうなシンプルな朝食を作って食べながら、知哉は昨日聞いていなかったことを聞くことにした。

「ところで、君の名前は？」

「私の名前…？」

「うん」

なんだかんだで余裕がなかったし、本来なら訊ねていたはずだが忘れていた。

「ずっと君って呼ぶのも何か変だし、無理にとは言わないけど、よかったら」

「ないよ」

答えてくれないかも、とは考えていたが、完全に予想もしていなかった言葉で即答された。

名前が、ない。それはどういう意味なのか。

「憶えてないの、自分の名前」

「憶えて、いない…？」

知哉の顔に疑問符が浮かんでいたのだろう。少女はすぐさま補足を入れた。

「名前だけじゃなくて、自分が何者なのか、何の目的でここにいるのか、ほとんど何もわからない。一つ以外、記憶をなくしちゃってるみたい」

淡々と、食事をしながら。

まるでなんともないような口振りで、告げていく。

「だから、気がついたらいたこの街に何かヒントがあるかもってうるうるしてたんだけど、思い出せなかった」

でも、その瞳はとても悲しそうで。

今にも泣き出しそうで。

苦しんでいることがどうしようもなくわかってしまったから。

「もう一度探してみるけど、見つからなかったら諦めようかなって」

この時、知哉は。

心の底から、彼女の力になりたいと想った。

「……それ、僕に手伝えないかな」

自分はこの都市の住人だ。土地勘ならある。有名どころをめぐれば少しは助けになるかもしれない。

しかし、それを聞いた少女は首を横に振る。

「だめ。これ以上迷惑をかける訳にはいかない」

今度は知哉が即答する番だった。

「迷惑なんかじゃない。そう感じるなら最初から関わったりしないよ」

それでも彼女はうんと言わない。

何か、理由があるのか。

「私が唯一持っている記憶。それはね、私が誰かに追われている記憶なの」

少し悲しそうに、その訳を告げられる。

「それが本当なら、今ここにただで危ないことに巻き込んでる。」

……嫌、なの。自分を助けてくれた人を危険にさらすのは」  
だから。

朝食を食べ終えた少女は席を立つ。

「もう行くね。助けてくれてありがとう」

「……待てよ！」

知哉は思わず彼女を呼び止めていた。

何故だか、このまま行かせたくなかった。

理由はないに等しい。ただ、放っておけないだけだ。悲しんでいる彼女に手を差しのべたいという、自己満足みたいな感情。

だけど、それが間違っているとは思わない。

昔、何かの拍子で兄に言われたことがある。

この世界に“絶対の正しさ”なんて存在しない、と。

それを聞いて、幼い知哉は兄に「正義のヒーローは正しくないの？」と訊ねた。

「正義の味方が倒す悪は、悪の組織にとっての正しいことなのさ。そいつらにとってはヒーローが間違っていることになる。すべての人間が肯定しない以上、ヒーローの正しさは絶対ではない」

その答えは当時の自分にはうまく理解出来なかった。ただただ不安になっただけ。自分一人では答えを出せずに、結局。

「じゃあ、もし僕の前に悪い人達が来たら？倒すのは正しくないの？」

何が正しいのか、その答えを兄に求めた。

その時の言葉は知哉の心に刻み込まれている。

兄は知哉の眼をみて告げた。

「お前にとって正しくはなくて、そいつらにとっては間違っているだけだ。人の数だけ正義と悪がある。問うだけ無意味だ」

だから。

「お前が正しいと思うことは曲げる必要がない。お前が間違っていると思うことは許容するな。世界に絶対がなくても、お前が譲れないものは守り通せ。でないときっと」

自分を無くしてしまつから。

彼女が不思議そうにこちらを見ている。

「何かな」

そのとき、一つアイデアが思い付いた。それを言葉として紡ぎだす。

「いや、あのさ。君の服、干したんだけどまだ乾いてないんだ」

少女は、そう言えば、という表情で自身の着ている服を見る。

「妹の服を勝手にあげる訳にもいかないし、そうすると君は乾くまでここにいないといけなくなるだろ？」

「確かにそうだけど……」

無断で貸している時点で勝手にも何も無いのだが、少女を納得させる言葉がこれくらいしか思いつかなかった。

「その間だけでいい。手伝わせてほしい」

少女の顔に浮かんでいるのは戸惑いだ。

「でも」

拒絶の言葉が返ってくるのはなんとなくがわかっていた。

だから、それを遮って話しかける。

「どっちにしても、僕は今日君と一緒にいることになる。同じ危険なら、君の力になりたいんだ」

渋い顔をしていた少女だが、やがて仕方がないと言いたげにうなずいた。

「わかった。……だけど、今日だけよ？」「ああ」

そうと決まったらすぐに行動しよう。外出の支度をしていると、ふと思い出した。

「そつえば検査だったな、今日」

すぐさま、迷うことなく断りの電話を入れる。

別の機会があるだろう。また今度、受ければいい。

「行こう」

「うん」

知哉は少女の手を引き、家を出る。

……それから数分後。

突然電話がなった。しばらくたち、留守番電話が作動する。

そこに残された声は、ある少女のものだった。

『もしもし、桐崎くん。橘よ。……昨日のことで話があるから、これを聞いたら連絡入れてちょうだい』

朝からずつと探し続けたが、なんの手がかりもない。

「他に、どこか行ってない場所は……」

とりあえず、この都市に来る目的になりそうな場所は片っ端から回った。しかし、そのどれも少女が記憶を思い出すきっかけにはなかった。

考えこむ知哉。その横では、少女が肩で息をしている。

少女は人混みを恐れていた。……いや、正確には人を恐れていた。多くの人が通る場所を見ると、それだけで怯えた表情になる。自分達がそこに行くとなると、震える手でずつと知哉の手を握り、放さなかった。

あの中に自分を追っている人間がいるかもしれない、と思っているのだろうか。

そう考えれば、この憔悴具合にも納得がいく。

「大丈夫……じゃ、ないよな。少し休もう」

その場に座り込み二人。

知哉の方も疲れていないと言えば嘘になる。

もう夕暮れが近い。一日中動き続ければ疲労もする。

彼より小柄で華奢な少女はなおさらだろう。

(……どうする)

知哉にはこれ以上案内できるような場所がない。もうすでに回っ

ている。

これだけ巡っても手がかりがないということは、少女が特定の個人に会うみたいな理由でこの都市に訪れたということかもしれない。だとすれば、正直打つ手がない。

時間をかければなんとかかなると思うが、少女が知哉を巻き込みたくないと思う以上、その時間はないだろう。

（どうすればいい）

考えこむ知哉。そんな彼に、少女が言葉をかけた。

「もうすぐ夕暮れね」

無理に、明るく修飾された言葉。

その内に、「こうなるだろう」と予測していた未来にたどり着いたと言わんばかりの諦めがあった。

「多分服は乾いてるはずだから、家に戻ったら出ていくことにする」少女の力になりたいと想った。

（だったら最後まで諦めるな。まだ、何かあるはずだ）考える。

「これ以上はもう無駄だよ。戻ろう？」

「いや、まだだ」

思いついた。

一つだけ、彼女にとってきつかけになるかもしれない場所を。

「今なら日が暮れるまでに着けるはず。行こう」

一旦知哉の家の前を通り、その向こうへ。

家から十分もたたないうちに道の様子が少しずつ変わり始め、だんだんと角度がついてきた。

知哉は少女の手を引いて、少し急な坂を上って行く。

人気のない細い、丘とも小山ともつかない土地にのびる一本道だ。「ねえ、これはどこに着くの？」

「有名な場所じゃないよ。基本的にどこにでもある公園。近所だから、昔よく遊んでた」

その答えに少女は首を傾げる。

何で公園なのかわからないのだろう。

そこは本当にただの……いや、むしろ寂れたといっていいちっぽけな公園だ。ある、一つの点を除いては。

数分歩いただろうか。入り口が見えてきた。

少し離れているが、ここからでもフェンスが錆びているのがわかる。誰も遊んでいないのである。子供の声も聞こえない。

中に入っただけに見えたのは、汚れた滑り台とぼろぼろのジャングルジム、長らく使われていないだろう砂場。それだけだ。

「本当にただの公園なんだね」

少女が中を一目見た感想だ。

それは、初めてここに来た知哉が抱いたものと同じだった。

「何で、ここに連れて来たの？」

当然の疑問。

それに対して、知哉はある方向を指差すことで答えた。

「“あれ”を見せるためかな」

公園を囲む金網状のフェンス。それが、彼の指した場所だけガードレールみたいな転落防止の柵になっている。

そこから見渡せるもの、それは。

「わあ……」

夕暮れの赤に染まる、都市の姿だった。

遙か遠くに見える城壁やところどころに建ち並ぶビルの黒い影と混ざって一つの景色を作り出している。

その景色は、幼き日に兄に連れてこられた時から変わっていない。高台にあり、この都市を見下ろせること。それが、この公園の唯一と言っている特徴だった。

さすがに全体とはいかないが、それなりの景観だと知哉は思っている。

彼がこの光景を少女に見せようとした理由は、この都市に対する印象を思い出すことが出来るかもしれないと考えたからだ。

何らかの目的があつて都市に来ていたのなら、都市に対する印

象とその目的が結び付いているかもしれない。

ここで抱いた印象から記憶を連鎖的にすくいあげられる可能性に賭けて、来てみたのだ。

柵に手をつき、身体を乗り出して景色を見る少女。

知哉はそのそばにより、そっと少女の表情を見た。

赤く照らされる彼女の顔には、見たことのない景色を見る感動が広がっている。

二人の間を流れる無言の時間。

どれほどの時がたったのだろうか。日は沈んでいないから、実際には僅かだったはずだ。だが、少女が呟くまでの時は、知哉にとつてなんだか永遠のように思えた。

最初は輝いていた少女の顔が、日が暮れるように暗くなってゆく。

「ごめんね。何も思い出せない」

泣きそうな声だった。

結局、自分は何の力になることも出来なかったのか。

これ以上、案内出来る場所はない。

何も出来なかった。それを思い知らされると同時に、とてつもない無力感に襲われる。

「……謝ることなんてないよ」

少女にそう答えるのが精一杯だった。

柵に背をもたれさせ、空をあおぐ。

その時だった。

何かに反応した少女が振り返る。

瞬間、すさまじい悪寒が全身を走った。

最初は風が吹いたのかと思った。

次に、気温が急に下がったのかと疑った。

だが、どちらも違う。

長く伸びている少女の髪は全くなびいていないし、肌で感じている気温には何の変化もない。

なのに、凍てつくような寒さを感じる。身体が凍りつくような、



殺気にも似た寒さを。

それは、昨日感じたものと同じだ。

（冗談、だろ）

震えながら少女は入り口を見ている。

その表情は、恐怖。死と絶望を前にした人間の顔。

昨日の、魔術師を前にして身体が動かなかった、自分と同じ顔。

その視線の先に何かがあるのか、知哉は薄々気がついていた。

こんな殺気を振り撒く人間にそうそう何人も、しかも二日続けて  
会おうはずがない。

ならば、これを放つ存在は、昨日と同一のはず。

視線を少女から入り口に移す。

そこには、昨日知哉と可鈴が対峙した魔術師が、仲間と思われる  
人間を連れて佇んでいた。

一步一步、こちらに近づいてくる。

人数は、男を含めて五人。

男達との距離が十メートルまで縮まる。

「昨日の少年だな」

「……何の用だ」

男の言葉に、震えながらも知哉は応じた。息を上手く吸うことが  
出来なくて、か細い声になってしまったが。

「口封じに来たのか？」

知哉が考える男がここに来た理由は二つ。

一つ目は、昨日殺し損ねた知哉を殺害すること。

もう一つ、それは。

「それとも、ここにいる女の子が目的か？」

少女が持っている唯一の記憶は、誰かに追われているものらしい。  
目の前の男は明らかに普通の魔術師ではない。

そして、彼が現れたのは知哉達が人気のないこの公園に移った後  
だ。

更には、少女はこの男達に怯えている。

これだけ材料があれば確実に片方が、もしくは両方が正解のはずだ。

「お前には用はない。あるのはその女だ」

少女がビクリ、と震える。後退りしようとするが、後ろは柵で下がることが出来ない。

「来てもらおうか」

その言葉と同時に、男以外の四人が知哉達を取り囲むように広がった。

知哉は思わず少女を庇うように前に出る。

「何でこの娘なんだ。目的は一体何なんだよ」

「お前には関係ないことだ」

「関係あるさ！ 僕は」

喰ってかかろうとした知哉。

だが、その途中で彼の言葉は止まった。

ヒュン、と風切り音が耳元で鳴る。

魔術を使われた。そう理解する前に、鋭い痛みが彼を襲った。

「っ　！？」

切り裂かれたのは、頬だった。奇しくも、昨日石が掠めたところとほとんど同じだ。

ふさがりかけていた傷が開き、鈍痛が走り出す。

「俺の知ったことではない。邪魔をするなら死んでもらう」

男はいつの間にか掌に作り出していた風の刃を突きつける。

危険を感じて無意識に仰け反り、下がりそうになった身体を意地で立て直し、知哉は男を睨み付ける。

それを見た男は知哉を障害になると判断したのか、掌に留めていた風刃を解放しようとする。

その時。

「待つて！」

刃が放たれようとした瞬間、それを制止する声が響いた。

「着いていくから！ その人を傷つけないで！」

知哉を救ったのは、少女の叫び声だった。

その言葉を聞いた男は一瞬訝しげな表情を浮かべたが、やがて知哉に向けていた腕をおろす。

「ならば、さつさと来い。時間がないんだ」

わずかな躊躇いのあと、少女は歩き出す。

そして、彼女は知哉と入れ換わるようにして前に立った。

その小さな背中に、知哉はやつとのことと声を掛ける。

「……何で」

その言葉のあとにどんな台詞を続けようとしたのか、言った知哉自身もわからなかった。

何で助けてくれたのか、と聞こうとしたのかもしれない。

何で逃げないのか、と問おうとしたのかもしれない。

それとも。

少女ではなく、自分に語りかけたのかもしれない。

何で、自分はここまで無力なのか。

そこで、少女は振り向き知哉に答える。

「助けてくれたから……かな」

一メートルも離れていないのに、無限よりも遠く思える彼女との距離。

「見も知らない、記憶がなくて自分が誰かも証明出来ない私を、何の対価も求めず何の疑念も抱かず、ただ単純に助けてくれたから」

少女は知哉に微笑む。その瞳に涙を浮かべて。

「本当に嬉しかった」

彼女の頬を、夕陽に照らされて赤く染まった涙が伝わる。

「さつきだって、私の前に立ってくれた。……誰が自分を追っているかわからなくて、人が怖かった。だけど、信じる事が出来たから」

私に巻き込まれて、傷ついて欲しくないの。

「さよなら、名前も知らない、私の恩人さん」

言い終えて、少女は知哉に背を向けて、立ち去ろうとする。

それを何も出来ないまま、見送ろうとした時だった。

お前はこれを、正しいと認めることが出来るのか

「!」

一つの言葉が、雷光のように脳裏を駆け巡る。

この世界に絶対の正しさなんて無くても

幼き日の言葉が蘇る。

それでも、誰かが悲しんだり、理不尽に傷付くのは間違っていると想うから

兄がこの都市を出てから一年後。彼は突然消息を絶った。  
何の痕跡も残さず、生死も不明。  
傷付き、悲嘆に暮れる家族の中で、知哉は誓った。

こんな想いを誰にもさせたくない。

この手が届く範囲全て。

この眼に映る範囲全て。

傷つく誰かに手を伸ばし。

理不尽に溺れる誰かに手を差しだし。

助けることが、出来る人間になる、と。

その瞬間、絶望に溺んでいた思考がクリアになり、狭まっていた視界が開けた。永遠と思えた少女との距離が、急に縮まる。

男の元に行こうとする彼女の肩に手を伸ばし、掴む。

「えっ？」

そのままこちらに引き寄せ、勢いのままに少女の前に立つ。

今度は思わず、ではなく。  
強い決意と自分の意志で。

「何で……」

少女の呟きが耳に届く。

それは、さつき知哉が言った言葉と同じだ。  
だから、それに答えた少女と同じように答えよう。

「助けたいから」

男達の、こちらを見る視線に殺意がこもる。  
全身に走る悪寒。

それでも身体は動く。

「君が言った通りだよ。君を助けたいと想った。それだけで  
それが全てだ」

恐らく男以外も全員魔術師だろう。

対峙すれば、魔術を使えない知哉が生き残る可能性など万に一つ  
も無い。

それでも少女の前に立つ。

「殺されちゃうよ……それでもいいの!？」

「いい訳ないよ!」

動転しきった少女の問いに、叫んで答える。

今この瞬間、膝が震え、歯がカチカチなっている。

目の前に佇む死への恐怖が、隠しきれずに身体中に現れている。

「死にたくないよ。痛いのは嫌だ。傷付くのも嫌だ。殺されるのも、  
殺すのもまっぴら御免だ」

「だったら!」

「それでも!」

少女の言葉を遮り告げる。

「逃げたくないんだ。ここで逃げたら、僕は自分を失ってしまう」

文字通り、決死の覚悟で。

誓いのままに、立ち向かう。

「僕になりたい自分の姿は、ここで逃げる僕じゃない!!」

男達が身構える。

自分は彼ら相手にどれくらい時間を稼げるだろうか？

後ろから視線を感じるが、知哉は振り返らない。

いつ襲って来るかわからない相手から、目を逸らす訳にはいかない。

男を睨み付けたままで、少女にしか聞こえない小声で逃げ道を告げる。

「後ろの斜面から降りれるはずだから、そこから逃げて」  
柵の向こう。

かなり急だが、降りれないことはないだろう。

入り口までの間には男がいるし、何よりそこまで時間が稼げる気がしない。

聞いている少女がどんな顔をしているのか、知哉にはわからない。  
笑っていないのは確かだろう。

……身構える。

殴りあいや喧嘩なら何度もしてきた。通用するかどうかはわからないが、やるしかない。

最後に考える。

何か、少女に言うておくことはないのか。

そこで一つ思い出したことがある。自分はまだ彼女に自己紹介をしていなかった。

少女の名前を聞こうとして、そのあとすぐ家を出たからすっかり忘れていた。

思わず苦笑する。

こんな状況下でそんなことしか思い付かない自分が馬鹿らしいが、思い付いてしまったのだから仕方ない。

「桐崎知哉」

「知哉……」

「最期まで名前の知らない誰かさんじゃ何か悲しいからさ、自己紹介くらいしとかなくちゃと思って」

それを聞いた少女が黙ってしまうのを感じる。

自分の名前を告げることが出来ないのを、後ろめたく思っているのかもしれない。

「ごめん。私には、知哉に教えられる名前が」

「無いなら無いでいいさ。……そうだ。どうせなら僕が一時的につけてあげるよ」

どうしてそんなことを考えたのかはわからない。ただ思い付いたから言ってみた。

少女は後ろで驚いている。いきなりこんなことを言われたらそうなるだろう。

一瞬だけ目を閉じ、彼女の姿を思い浮かべる。

「思い付いた」

それを伝えようと目を開けた瞬間、相手が動いた。

（……来る！）

男が風を放とうとし、一人が武器を呼び出す。

残りの三人も魔術を起動させ始めた。

どうやら名前を伝える余裕はなさそうだ。

「行つて！」

身体を軽く沈め、カウンターで踏み込もうとする。

振り返らずに、前に。

だが、それを行うことは出来なかった。

知哉の背後。少女がいるはずの場所に、少女ではない何かの気配を感じた。

（何が起きた！？）

一瞬知哉の動きが止まった。

その刹那、肩を掴まれ、知哉が少女にしたように後ろに引き寄せられ、そのまま振り向かされた。

目の前に、少女の整った顔が飛び込んで来る。

その瞳。

髪と同じ、鮮やかな真紅の瞳が、紅の光を放っている。

明らかな異変。

そして今、知哉は自分の前にいる少女に違和感を感じていた。

それは、昨日街に感じたようなもの。

外見は同じでも、いきなり中身が変わっているような感覚。

混乱しきった知哉に彼女は顔を近づける。

そのまま少女は紅く輝く瞳を閉じて

「!？」

知哉の唇に、何か柔らかいものが触れた。

同時に世界が暗転する。

気がつくと、周りから人が消えていた。

先程まで夕暮れだったはずなのに、いつの間にか日は完全に沈んでいる。

空には月が昇り、公園の中を切れかけた街灯と共にぼんやりと照らしていた。

慌てて見渡しても誰もいない。

（何がどうなったんだ？）

パニックになりかける知哉。

そこに、少女の声が届いた。

「慌てなくてもいいわ。ここは貴方の心象世界みたいなモノ。他に誰もいないのが当たり前よ」

振り向くと、街灯の上に紅の髪をした少女が腰かけている。

さっきまで一緒にいた少女と全く同じ姿。

だが、纏う空気が完全に違う。

穏やかさなど微塵も感じない、虚無の冷たさとも言えいいのか。

とにかく、知哉には彼女が少女と別人にしか思えなかった。



「……誰だ」

「私？ 名前は無いわ。私は“私”よ」

答えは、知哉の背後から返って来た。

街灯の上からいつの間にか知哉の後ろに移動している。

“私”と同じだけ同一ではない存在。それが私。そして」

知哉が驚く暇もない。

ツカツカと歩み寄り、顔を近づけてくる。

「貴方を変えるモノよ」

「僕を、変える？」

何を言われているのか全然わからない。

知哉を変えるとは？

「どういうことだよ」

その問いに、目の前の少女は呆れるように肩をすくめる。

「そのままの意味よ。“私”は私に全てを押し付けたから、貴方を助ける力がなかった。お陰で私は力を手に入れたけど、貴方を救うことは不可能だった。だから、貴方が貴方を護れるように変えるだけ」

やはり何を言っているのかよくわからないが、所々気になる箇所がある。

恐らく、“私”とは今日一緒にいた、目の前の少女と瓜二つの女の子のことだろう。

“私”が全てを押し付けた。それが本当なら。

今、目の前にいる彼女は過去に少女と関わっていることになる。

「君は、彼女の記憶の手掛かりを知ってるのか？」

「さあ？」

はぐらかされた。

「貴方に教えてあげる義理はないもの」

「ッ！」

詰め寄りそうになるのをこらえる。

一度息を大きく吸って、気を平静に保つ。

知哉が彼女に聞きたいことはまだあった。

「君は何で僕を助けてくれる……いや、変えようとしてくれるんだ？ 君と彼女はどんな関係なんだよ？」

瞬時、空気が変わる。

聞いてはいけないことだったのか。

それを聞いたとたんに、少女の表情が険しくなり、殺意を纏い始める。

「っ！？」

「本当は、貴方を見捨ててもよかった。“私”の願いなんて聞いてあげるつもりなんて無かったのよ。私は逃げ出した臆病者の“私”が殺したいほど憎いから」

殺意を撒き散らしながら、少女は冷淡に笑う。

その空気に飲まれ、知哉は呼吸すら満足に出来なくなる。

「でもね、それ以上に貴方を殺そうとするあいつらが憎いのよ。全身を細切れになるまで切り刻んでやりたいくらいにね」

彼女が放つ殺気はあの魔術師の男よりも遥かに冷たい。凍りつかせるどころではない。切り刻むような、刃にも似たものだ。

身動きすら取れない、絶対零度。

「だから、貴方の質問に答えるとするなら、それは“気紛れ”って解答になるわ。気が晴れるまで叩きのめしてあげなさい。どうせ、後で私が皆殺しにするんだから」

ふっ、と突然殺気を消す少女。

知哉の止まっていた呼吸が再開し、全身から冷や汗が流れ出る。

それを気にすることもなく、後ろに跳ねて去ろうとする少女だったが、何かを思い出したように再び目の前の出現する。

「そうそう、こういう時は大抵、力を与える側が何かを告げるのがセオリーなのよね」

ぐいっとな顔をよせる。

あと五ミリ近づけば、キス出来るほどに。

「もしも“私”が貴方を変えるのなら、きつとこう言うでしょう

ね」

その心に刻みなさい、と少女は告げた。

「あなたのなりたいあなたの姿が、あなたの願いを護りますように」

「

そのまま後ろへ瞬間移動し、少女は闇の中に消えて行く。

「ばいばい。二度と会うこともないでしょう」

彼女が影の中に消える瞬間、その顔が見えた。

冷笑。だが、ほんの少し、ほんの少しだけ寂しそうに見えた。

それが、知哉が護ろうとする少女と重なってしまつて

「待ってくれ！」

暗転していた世界が元に戻る。

空間を照らすのは、月明かりではなく夕焼けの赤だ。

目の前には、自分と唇を重ねている少女。

そして、知哉を殺し、少女を奪おうとする魔術師達。

戻ってきた。

そう実感するのと少女が崩れ落ちるのは同時だった。

「！？」

考える前に身体が動いた。倒れる少女を抱き抱える。

華奢といつても人間一人。その重さに知哉の姿勢が転倒寸前まで崩れた。

視界の片隅にうつるのは、目の前の迫った魔術師の一人。

こんな体勢では、時間を稼ぐどころか反撃も回避も、ましてや少女を逃がすことも出来やしない。

（何とかしないと……この娘を護るんだ！）

そう、思考した瞬間だった。

少女と繋がっていた唇から、身体中に電流に似た感覚の何かが広がり始めた。

それは知哉の体内に存在する神経ネットワークを伝わりながら、強引に彼の魔術用の神経回路を組み換えていく。

「がつ!?」

今まで感じたことのない痛みが知哉に襲い掛かる。

意識が飛びそうなほどの激痛。だが、それを歯を食い縛ることでなんとか耐えた。

（いま、いしきをなくしたら……!）

途切れかける思考を何とか繋げる。

それでも視界が段々と狭まっていき、やがて真っ黒に染まった。

同時に、視覚以外の五感も全て吹き飛ぶ。

自分以外の何も存在しない闇の中。

その中で、知哉は“視て”いた。

自分に襲いかかろうとする男達が放つ脳波を。

それが世界を歪めることで引き起こされる魔術を。

視覚で見ているわけではない。だが、“視ている”としか言いようがない感覚で感じていた。

その暗い世界では時の流れがやたら遅く全てがスローモーションで進む。

しかし、知哉は気づく。

時間が遅いのではない。

自分の認識が、思考速度が加速しているだけだ、と。

次の瞬間。

知哉の神経ネットワークが完全に組み換わり、脳波がネットワーク上を駆け巡り始める。

同時に、加速していた認識速度が元に戻る。

五つの方向から放たれる魔術攻撃。

今から避けることは出来ないだろう。

それでも少女が逃げる時間を稼ごうと知哉が前に出た時。

ソレは、目覚めた。

知哉の周りに、漆黒の光の粒子が数多発生する。

光なのに黒い。おかしいかもしれないが、確かに黒色の光だ。

それは彼を取り巻くように動き始めた。

今、知哉が鏡を見たら気がついただろう。

自分の瞳が、キスする前の少女のように、漆黒の光を放っていることに。

知哉の頭の中に、何かの音が響く。

それはまるで、悪魔を呼び出す呪文みたいで

『深淵よりもなお深く

漆黒よりもなお暗く

目覚めよ汝

其は万物を砕く黒き闇！』

その瞬間、知哉達を中心に黒い波動が放たれた。それは襲いかかる魔術を掻き消し、男達を弾き飛ばす。

更には、渦巻く黒光が知哉の頭上に集まって行き、直径二メートルほどの球体へと姿を変えた。

「何だ……！？」

男が驚愕の声をあげる。

知哉も何が起きているのかわからない。

ただ一つ、理解出来たこと、それは。

これが少女に与えられた、知哉の力　今まで彼が使えなかった魔術によって引き起こされているということだけだ。

「これが、僕の魔術なのか……？」

だが、変化は止まらなかった。

漆黒の球体を突き破り、“何か”の腕が出現する。それは妙に丸みを帯びた、機械のようで悪魔のようなモノだ。

球体に潜む“何か”は一度腕を引っ込めると、今度は自分が開けた穴に両手をかける。

穴から覗くのは、瞳と思われる緑の光。

そのまま力ずくで球体を引き裂き、ソレはこの世界に顕現した。

ソレは、半透明な黒い影のような光で構成された、魔神だった。

知哉より少し大きい身長、鉄のような質感の装甲みたいな身体、全体的に丸みを帯びたフォルム。

そこに立っているだけで、まるで世界を塗り替えていくような存在感。

魔神が自分達と男の間に降り立つのを、知哉は半ば呆然として眺めていた。

（何なんだ、この術式）

今までに見たことも聞いたこともない。授業で魔術適性の大きな分類は習ったが、多分今日の前に立つソレは、そのどれにも分けられないだろう。

「かまわん、やれ！」

知哉が我に返ったのは、男達が体勢を立て直し、再び攻撃してきた瞬間だった。

迎撃しようとして初めて知哉は気づく。

（魔術ってどう使えばいいんだよ！？）

今まで一切の術式を使用出来なかったので、魔術の操り方がわからない。

ましてやこんな特異な術式、制御出来るはずが

「出来るかどうかじゃない、やるんだ」

助けたいと願ったはずだ。

助けたいと誓ったはずだ。

知識がないことを嘆いても現状は変わらない。

「腹括れ、僕」

そもそも魔術は己の思考を現実には押し付け、改変するもの。  
ゆえに。

強く願えば、きっとそれは叶うから

「この娘を、護れ　　！！」

心からの叫び。

魔神はそれに応えた。

左手を正面に掲げる。

その先には男が放った突風の一撃。

風が魔神を飲み込もうとした瞬間。

盾のように、魔神の掌を中心として魔法陣が展開される。

それは瞬時に漆黒の闇で構成された防壁となり、いとも容易く風を受け止めた。

直後、横合いから二人の魔術師が挟み撃ちのように襲いかかる。

身体制御術式を使用しているのか、普通の人間よりも高速な動きだ。

一人は短剣、もう一人は薙刀で知哉に斬りかかってきた。

「受け止める！」

知哉が叫ぶと同時に、彼の脳から神経に閃光が走り、わずかな時間頭の中が白に染まる。

脳波を媒介にして放たれる意思に反応して、魔神が両手を左右に広げる。

今度は二つ同時に闇の盾を発動した。

鋼と魔術がぶつかり拮抗する。

だがそれは、一秒にも満たないわずかな時間だった。

耐えきれなかった二つの武器が碎ける音。

対して魔神の盾は揺らぎもしない。

その盾が、それぞれ魔神の左右の掌に収束した。

そのまま両手の先を武器を砕かれ動きを止めた魔術師に合わせる。  
左手の闇を薙刀の魔術師に向けて解放。

放たれた闇は衝撃波に姿を変え、目標を捉えた。

爆音。

波動を叩きつけられた相手が宙を飛ぶ。

あまりの威力に呆然としていた短剣を持つ魔術師に、魔神はすぐさま飛びかかる。そのまま左手で腕を掴み、吹き飛ばされた魔術師に弾丸のような速度で投げつけた。

攻撃が終わった直後、残っていた二人の魔術師が大地と氷の槍を術式の使用者である知哉目掛けて射出する。

魔神の隙を突いて打ち出された一撃は知哉の面前まで迫ったが、目標を貫くことはなかった。

「防げ」という思考によって動いた魔神が、右手に集めていた闇を放って槍を全て砕いたからだ。

空中を浮遊して移動し、魔神は知哉と男の間に立つ。

少女を地面に寝かし、知哉は男と向き合う。

「……まだやるか？」

肩で息をしながら男を睨む知哉。

この魔神の力は凄まじいが、反面かなりの体力を喰うらしい。

強気な台詞を言っではみたが、すでに知哉は立っているだけで精一杯の状態だった。

（けど……ここで倒れる訳にはいかない！）

右手で頬を伝う血を拭う。鈍痛が走る。

「答えるまでもない」

倒れた魔術師達を立っている仲間に回収するよう命じながら、男は一人知哉と対峙した。

「ならっ！」

知哉は「男を止める」意思を放つ。

脳裏が灼熱に覆われ、意識が途切れかけるがかるうじて繋ぎ止める。



魔神が右手を振りかぶり、男に殴りかかった。  
対する男は左手を上げる。

（何か……来る！）

人間を大きく上回る速度で繰り出された拳が叩き込まれる寸前。  
上げられた手が振り下ろされた。

（！？）

殺気に反応して魔神を止めていなかったらどうなっていたかわからない。

男は知哉が気にもかけてなかった上空に高密度の風の槍を作り出し、それを魔神の頭上に降下させたのだ。

とつさに後退した魔神の右肩を掠める。その余波は魔神の装甲を裂き、肩に腕を落とさんばかりの大きな切り傷を入れた。

地面に槍が激突し、地震のような震動と爆発と言ってもいい衝撃が広がる。

幸い魔神が間にいたお陰で知哉と少女には衝撃は届かなかった。

……しかし。

同時に、知哉を今までの怪我と比べ物にならないほどの痛みが襲った。

「があああ！？」

激痛は右肩から生まれている。霞む視界で右肩を見ると、服は破けていない。

しかし、右肩に傷が走り、そこから流れる血は腕を伝って地面に垂れている。

それが意味することは。

（ダメージが……フィードバックしたのか……ッ）

魔神が受けたダメージは知哉にも返ってくるということだ。

ダメージがそのまま伝達されていれば今の一撃で腕が千切られていたんじゃないかと思う。

激痛の中、知哉は魔神の腕を見てそう感じた。知哉自身の傷は大きな切り傷程度だったからだ。

しかし、「程度」と言ってもそれは魔神と比べたらの話。

ある程度は軽減されているようだが、それでも今までの人生で受けた傷の中で一番深いだろう。

あまりの痛みに涙が出てくる。

膝から力が抜けて、倒れかける。

……それでも、歯を食い縛って立ち続けた。

出血のせい、疲労のせい、次第に意識が薄れていく。

それでも、知哉は立ち続けようと足掻く。

「これ程とは」

男が知哉に声をかけたが、うまく聞こえなかった。

五感全てが低下していく。

だから、男が知哉に止めを刺そうと術式を起動させたことにも気がつかなかった。

「だが、これで終わりだ」 狙いを定め、風刃を発射しようとする男。

だが、構えられた術式が知哉を切り裂くことはなかった。

公園の入り口から男目掛けて発動された炎の術式を相殺するのに使われたからだ。

「昨日の女か！」

男の、憎悪に近い感情が混ざった怒号が響く。

「今日は逃がさない！」

夜の闇に包まれていく公園で、一際明るく輝いて見える少女。

「たち…ばな……？」

消えかけた視覚の中、炎を纏った可鈴が微かに見えた。

そして、その後ろにいる人達も。

（だれ…だ）

意識が明瞭な状態なら、知哉はそれが対魔術犯罪の警備員二十人だと気がついただろう。

当然、男達もそれに気づいた。

男は一瞬だけ気を失っている少女を見たが、すぐに何かを決意する。

「退くぞ。あの人数相手は分が悪すぎる」

直後、男達と警備員が交戦状態に突入した。

可鈴はそこに加勢しようとしたが、公園の端で佇んでいる少年と、傍らで横たわる少女に気がついたのか近づいてくる。

最初は「危ないから離れて」と呼び掛けていたが、少年が知哉と気がついたとたんに顔色が変わった。

「桐崎くん！？ 何でこんなところに！？」

その驚きの声は知哉に届いていない。

慣れない魔術を使い、命を賭けた極限状況に置かれ、怪我で出血している。

倒れてはいないが、意識はすでにあつてないような有り様だ。

もう、知哉には目の前の人がいるくらいしか認識出来なかった。

しかし、そんなことが来たばかりの可鈴にわかるはずもない。

「今日いくら連絡しても返事がなかったのは、もしかして 桐崎くん？」

何かおかしい。

知哉の憔悴具合から異変を感じた可鈴が、怪訝そうな顔になる。

だが、知哉はそれに応じることが出来なかった。

気がつくと、知哉の目の前に地面があった。

ぼんやりと自分が倒れたことに気がつく。

自分の近くで誰かが叫んでいる。

「桐崎くん！？ しっかりし 何の出血！傷口は 血 止  
め 返事を」

うまく聞こえない。

そう感じる思考さえ薄れていく。

……そして、知哉の意識は闇に沈んだ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9291w/>

---

シャドーディザイア

2011年10月9日03時26分発行